

言文一致体小説の技法

2012・11・23 野村

1 「言文一致」とは？

1-1 話し言葉と書き言葉

・ 話し言葉

書き言葉

口語体

話し言葉の文法・音韻・基礎語彙に基づく

文語体

古典語・外国語（漢文・ラテン語）に基づく

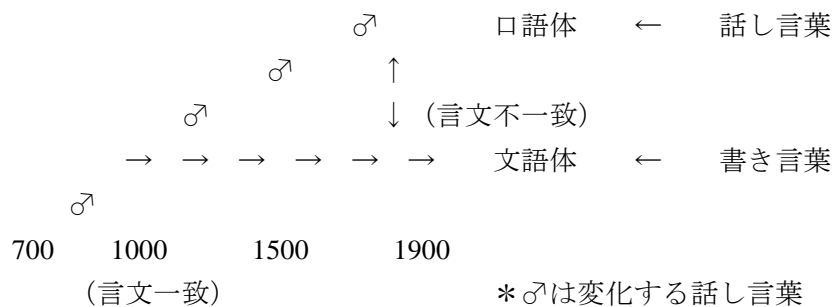
1-2 言文一致とは？

・ 明治初期には適切な「書き言葉口語体」が見あたらなかった。

「言文一致」とは 書き言葉口語体の創出

「話し言葉＝口語体、書き言葉＝文語体」のように見えてしまう。

・ 文語体・口語体についての日本語史



・ 言文一致についての当時の見解

文章と言語とは同一なるべきものにして只口にて述ぶるがゆゑに言語となり筆にて書くがゆゑに文章となるの差はあるとも言語は文章に通じ文章は言語と同じからざるべからざるや是れ亦勿論のことなるべし然けどもこは我々が何も左様に新奇の事を言ふものにはあらずして実際外国就中欧米諸国に於いては文章と言語と同一にして書に筆したるものも之れを朗読すれば言語談話と異ならざるを以ても決してこの言の新奇又は虚偽にあらざるを知るべし（『明治日報』社説 「文章の改良」 明治一八年一月）

・ 明治初期の言文一致体

明治二十年代の文化の独創といえ、二葉亭四迷や山田美妙による新しい日本の言語（近代言文一致体）の創造のことを想いださなければならぬ」（色川大吉『近代国家の出發』 初版1966）

文体史上にあつての言文一致体の確立は、近代散文の大特色といわねばならない。小説の方では、それが明治二〇年に、二葉亭四迷と山田美妙によって先導されたことは、周知の事実である。」（吉田精一「小説の文章」 1963 『講座現代語5』）

木挽町の高島徳右衛門の家で此ほど玉つき其外の遊びをして高貴の方々も集まられ昨日も催しがあって幹事は海軍の澤太郎左右衛門君がいたされ三条公はじめ其ほか大勢出られました。是は勝負ごと杯では無くただ交際を広くする為であります。（『読売』明治10年1月4日）

おお
大新聞 紙面大、政論中心、文語体、漢文調

こ
小新聞 紙面小、社会・事件ネタ、口語体交じり、啓蒙調

2 二葉亭四迷と山田美妙

2-1 言文一致体の低迷と新たな言文一致理論・運動

明治10年代は低迷の時代（しだいに文語体の文章ばかりとなる）

理論・運動 先の『明治日報』参照

2-2 山田美妙の言文一致体

・山田ははじめ（『武蔵野』）ダ体、デアル体の文章を選んでしたが、やがてデス・マス体の文章に変えた。

あゝ今の東京、昔の武蔵野。今は雖も立てられぬ程の賑はしさ、昔は閑も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨付けられる鳥も昔は海辺四五丁の漁師町でわづかに活計を立てゝて居た。今柳橋で美人に拝まれる月も昔は「入るべき山もなし」、極素寒貧であつた。（『武蔵野』明治20年11月 『読売新聞』）

知盛の今日のむねぐるしさ、わざと従容として無理に笑顔を売るものゝ、その笑顔は冬野の寒菊、無常の風を待つのみです。主上に対する眼、女房どもに向ける目眦、いずれの優劣なく無念の露を宿して、否帯びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが次第に紅く為つて行き、いつの程にか髪の毛も針を植ゑて居るやうです。

かなはぬまでもと思ふ心は今でも知盛の胸には充ちて居ますから一寸帰つて主上に拝謁するや否や更にまた引返しては敵に近付いて士卒をばげまして居ます。……

それから何を話して居るか元より秘密にしたことゝ見えて次の間へ行つて聞いてもよくは聞えませんが、たゞ非常に嘆きかなしむ声がします。（『蝴蝶』明治22年1月 『国民之友』）

向ふから来たのは男です、下駄を穿て居ます、が、後が減て居ます、そして刈込前の散髪です、フケの雪が襟の麓に積つて居さうです、是が女なら同うでせう？ 鬘を結て居るに相違ありません。（斎藤緑雨「小説八宗」 明治二二年一月『東西新聞』（のち『東京絵入新聞』））

*なぜデスマス体か

はじめ言文一致の基礎にするのは何が宜いかと考へて、まず第一、「簡略」の徳のある

物を扱おうと掛りました。これは従来の和文が冗長に過ぎた点、それを避けやうと第一思ツた結果です。それで「簡略」の点で上中下三流の語法をしらべると、今思へば間違ツて居ましたが、下流の語法が一番その点に於て及第するやうでした。それからその語法を用ゐて来る、さう為ると第一に当惑したのは「何々ダ」といふ語法が出て来たことです。「ダ」は音調さへ甚だ耳に立つものを更に下流であらう用ゐればいよいよ怪しく見えて来ました。（中略）後にまた深く調べて見ると実に案外、中流と下流との間には対して簡冗の相違が無いのです。（中略）元来下流の用ゐられたのはその簡である為でした。それが左様ではありません。ならば下流はどうしても中流に一歩ゆづる訳です。（「不知庵大人の御批評を拜見して御返答までに作つた懺悔文」明治二一年 「女学雑誌」一三五、一三六）
* 簡単だから口語体にするということはない。

この時代の著述家は、文語体の方が書きやすい。

2-3 二葉亭四迷の言文一致体

2-3-1 「浮雲」の文章

- 20・6月 『浮雲』第一篇刊。
- 21・2月 『浮雲』第二篇刊。
- 21・7月 「あひゞき」掲載（『国民之友』）。
- 21・10月 「めぐりあひ」掲載（『都の花』）。
- 22・7月 『浮雲』第三篇掲載開始（『都の花』）

* 「浮雲」梗概（主に二葉亭による）

内海文三という男は小さい時から縁戚の家に養われ――其の家に阿勢という活発な娘が有って、文三と昵まじくになっていたが、この娘は物に移りやすい気質であった。文三は官吏になっていたが、免職になると、阿勢と母親の阿政に口汚く小言を言われた。そこへ文三の同僚の本田昇というものが遊びに来て阿政母子にちやほやされ、三人揃って団子坂の菊見に行ったが、文三にはどうにもならなかった。文三は口惜しがったが、何か言うと反対に本田に嘲弄されるので、胸苦しくてならない。阿勢が我を疎むのかと疑って言い合いになってしまう。その後も文三はお勢母子にやりこめられ、本田はますます阿勢母子に接近、阿勢の軽躁も勢いをます。文三は何とか阿勢をたしなめようと、悶々とするばかり。

* 「浮雲」の文章

千早振る神無月も最早跡二日の餘波^{なごり}となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡^{とわた}る蟻、散る蜘蛛の子とうよ～ぞよ～沸き出てゝ来るのは、孰れも顛^{いづ}を^{おとがひ}に^し給ふ方々。しかし熟々^{つらつら}見て篤と點検？すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髭、顛^{あご}の髭……ありやなしやの幻の髭と、濃くも薄くもいろ～に分る。髭に続いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物つくめには仏蘭西皮の靴^{めをと}の配偶

はありうち、之をめす方^{かたさま}様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。（『浮雲』一一一）

「さう。」

ト言捨て、高い男は縁側を伝つて参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る。茲^{こゝ}処は六畳^{こざしき}の小坐舗、一件の床に三尺の押入れ付、三宝は壁で唯南ばかりが障子になってゐる。床に掛けた軸は隅々も既に虫喰んで、床花瓶^{とこはないけ}に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据ゑ付けてあつて、筆、ペン、楊枝などを掴み挿しにした筆立て一個に、齒磨の函と肩を比べた赤間^{あかま}の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立ちの書函、是には小形の爛缶^{らんぶ}が載せてある。（『浮雲』一一一）

「アラ月が……まるで竹の中から出るやうですよ、鳥渡^{ちよつと}御覧なさいヨ。」

庭の一隅に栽込んだ十竿ばかりの織竹の、葉を分けて出る月のすずしさ。月夜見の神の力の測りなくて、断雲一片の翳だもない、蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴たるばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭を半より這初め、（中略）終に間の壁へ這上る。（中略）風が吹罷れば、また四辺蕭然となつて、軒の下艸に集く虫の音のみ独り高く聞える。（『浮雲』一一三）

台がオロシヤゆゑ緻密々々と滅法緻密ががるをよしとす「煙管を持た煙草を丸めた雁首へ入れた火をつけた吸つた煙を吹いた」と斯く言ふべし。（前掲 「小説八宗」）

*二葉亭の文章

岩波文庫版『父と子』（金子幸彦訳 「あとがき」には「1959年8月」とある。）

アルカーディはこのような考えにふけていた……彼が考えにふけているあいだにも、春はそのいとなみをつづけていた。あたりのすべては金色をおびた緑にかがやき、あらゆるものが、あたたかいそよ風のしずかな息吹に、ひろびろとやわらかく波うちながら、光っていた——木立も、やぶも、草も。空のすみずみにまでひばりたちの……

自分はたちどまった……心細くなって来た、眼に遮る物象はサツパリとはしてゐれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてたうちにも、どうやら間近になった冬のすさまじさが見透かされるやうに思はれて。小心な鴉が重さうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛びすぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、急に飛び上がって、声をちぎるやうに啼きわたりながら、林の向ふへかくれてしまった。鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来たが、フト柱を立てたやうに舞ひ昇

って、さてパッと一斉に野面に散った。ーア、秋だ！誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響き渡った……（「あひゞき」二葉亭訳 明治21年

「瘦我慢なら大抵にしろ。」と昇は云った。……誰が瘦我慢してゐると云った、また何を瘦我慢してゐると云った。」（『浮雲』二一九 回想場面）

*「あひゞき」の文章は、「浮雲」以上に人々に感銘を与え、影響力を持った。

2-3-2 二葉亭はなぜ言文一致体を選んだか。

言文一致の問題は、『小説総論』だけでなく、「現実の真味を如実に描写する」（『平凡』原注）写実主義や「人生の味わひを言ひ取るのが小説家の本分」（『長谷川二葉亭氏「浮雲」の由来及び作家の覚悟論』）と心得た強固なりアリズム精神に支えられたところの、二葉亭にとっては正しく必至のものであったこというまでもあるまい。くり返していえば、二葉亭が目ざした文学は、東洋流の文人趣味や道楽的な戯作ではなくて、根本の人生問題に重きを置いた人生のための近代文学で、「真理に新しい生命を賦して其生命を直接に具体的に再現する」のにあり、人生の説明ではなしに人生の真味發揮のための「描写」が不可欠必至のものであった。ここに二葉亭文学における人生の真味を描写するための活きた言文一致の新文体創造に対する確固たる内面的要求並びに必然性があり、二葉亭自身そうした自覚のもとに果敢にこれを成しとげようとしたわけだ。（山本正秀 『近代文体発生の史的的研究』 1965）

*リアリズムと言文一致体の必然的關係が明らかになっていない。

〔「浮雲」は〕「山田美妙の「武蔵野」と並んで、口語文による小説の最初の試みでした。（中略）「浮雲」の文体は今日の口語文とはかなり異なった感じのもので、ことに第一篇は戯作の調子が濃くのこつてゐますが、「言文一途」といふ根本の態度は確立してゐたので、これは我国の近代小説の展開にやがて大きな意味を持つ先見でした。次ぎにその描写の手法が、当時の小説の水準を抜いて、作者の思想や好悪をはなれた客観的なりアリズムであった点で、（中略）これは異例であり、彼が自然主義の先駆者と見られるのも、このように「人生のありのまゝ」を描いた点においてでした。」（中村光夫 『明治文学史』 1963）

彼はその頃から、何か新しい文体、戯作風な飾りを切り捨てた、誤魔かしのない、考えることをそっくりそのまま写せる文体が必要だと考へていた。（伊藤整 『日本文壇史2』 1954）

- ・「何でも思ふことが楽に書けるやうに」（『文談五則』）
- ・「言語は意思の反映なりせば」「心に思ふ所を筆に現はしたる者は則ち **Written language** 文章たらざる可らされば」（「くち葉集 ひとかごめ」 明治21）

「文三の内面を直叙した」ような「内面描写が、その功罪は別にしても、言文一致体の文章でなければ不可能だったことはたしかである。日常の思考の生理から離れた文語文に

よって、意識の奥底の微妙な流れをあるがままにとらえることはきわめて困難だからである。」（十川信介 『明治文学 ことばの位相』 2004）

2-3-3 思い言語 日常の思いの言語

- ・「考えることをそっくりそのまま写せる文体」 日常の思いの言葉、（内語）
- ・「話し言葉の、方言の、ぞんざいな言語」で「思っている」
「あっ、一万円札だ」、「一万円札や」（関西弁）、「一万円札なり」、「一万円札です」、

「一万円札でございます」

- 『浮雲』の言語の基層 「思い言語」。 美妙はそうではない。デスマス体
「思い言語」の文学に魅力があるから、その後雪崩を打って「口語体」へ進んだ。
（ただし、「標準語＝東京山の手語」でないと駄目 出版は全国的）

*なぜ「思い言語」に魅力があるか。

新しい内面の登場（昔から内面はある）

旧 人に隠しておきたい内面

新 （隠したくもあるがしかし）表現したい内面

*なぜそのような内面が生じたか、どういう内面か。

- ・旧社会、幕藩体制

身分、家格、家職によって人間が規定された。

- ・近代社会の成立

（少なくとも建前は）職業選択の自由、結婚（恋愛）の自由が保証された。

将来何になりたいか、と問われる。

→立身出世主義 明治初期

福沢諭吉『学問のすすめ』、中村正直『西国立志編』 → 「将来の自分」
ところが

- ・近代社会の実際 明治中期

職業選択の自由 → 失業の自由

恋愛の自由 → 失恋の自由

意識・自由 実際・不自由

己が何者であるか考えざるを得ない。 内面的にならざるを得ない。

（うまく行っていれば自分について何も考えない）

*二葉亭は「浮雲」執筆時、外国語学校（露語）を自主退学、浪々の身の上だった。自宅の二階に引きこもり状態だが、一方、坪内逍遙と当時最高水準の文学談義を交わしていた。

意識・高度に自由 実際・不自由

島村抱月 二葉亭追悼文集

「二葉亭二則」

読後の印象として、今も明白に覚えてゐるのは、何だか是れまでに無い、自分等みづからの心中の秘密を穿つた小説だといふ感じであつた。紅葉の『色懺悔』を読んでも、美妙斎の『蜘蛛』を読んでも、当時の若い血に酔はされるのは同じであつたが、是等は寧ろ向

ふに在る他処事として面白かつたのである。それが『浮雲』となると他処事でなくなる。此の作者の前に出ると、自分等の現在の心境まで見透かされるのでは無いかと思つたり、作者が自分等と全く同じ心を持つてゐたりするのだらうとも考へたりして、兎に角他とは截然類の違つたものを読まされたといふ気持が切に身に迫つた。是を今日から解釈して見ると、つまり当時現在の我等が活きた血と肉とに触れたのである。……矢張り新旧思想の衝突といふ理解よりも、たゞ活きた我に触れたといふ感じで保留せられてゐた。

*以上が『浮雲』の魅力

3 言文一致体の制覇 『浮雲』のあとの言文一致体

* 20世紀明治の小説 1900年=明治33年

現在、多くの人が知っている明治小説は20世紀明治の小説(文庫化)

- ・夏目漱石 『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』、『三四郎』、『こゝろ』
 - ・島崎藤村 『破戒』
 - ・田山花袋 『田舎教師』
 - ・国木田独步 諸短編文庫化 *これらは口語体
 - ・尾崎紅葉、幸田露伴、森鷗外(初期)、樋口一葉、徳富蘆花 *主として文語体
- *ちょうど1900年頃に、小説の文章は文語体から口語体に一挙に変わった。

3-1 言文一致体小説の増大

美妙・二葉亭の後は再び低迷

明治20年代後半から次第に増大

二葉亭は小説の筆を折つたが、その影響力がじわじわと浸透。

*言文一致体推進は次の三派による。 硯友社系、文学界・民友社系、「ほととぎす」系

・小説が掲載される主な雑誌

『都の花』『国民之友』『文学界』『太陽』『文芸倶楽部』『新小説』

文語体 対 口語体

明治28 83 : 17

川上眉山(「大さかづき」、山田美妙(「鰻旦那」など)、巖谷漣(「色風琴」など)、江見水蔭(「女房殺し」など)

明治29年 75 : 25

美妙、江見水蔭(「泥水清水」、太田玉茗(「野ぎく」、小杉天外(「蝶ちゃん」、小栗風葉(「失恋詩人」、嵯峨野や(「睡美人」)

明治30 69 : 31

小杉天外、石橋思案、江見水蔭、広津柳浪、川上眉山、内田魯庵

明治31 53 : 47

明治30+泉鏡花

明治32 46 : 54

『文芸倶楽部』文語体優勢

明治33 42 : 58

『文芸倶楽部』口語体優勢

文語体作家 遅塚麗水、岡本綺堂、幸田露伴、田山花袋、三宅青軒、田村松魚
・二十世紀の第一年、即ち明治三十四年において、日本の社会が正に機運に向っている所の、尤も大なる改良事業はと問はゞ、先づ「言文一致」と答へねばなるまい。(堺枯川(堺利彦) 『言文一致普通文』 明治34年) →以後20世紀明治の小説

3-2 物語とはどういうものか

*歴史叙述

・桶狭間合戦について

『三河物語』 大久保彦左衛門(永禄三1560生) 「日本思想大系」26による
義元は、其をば知り給ずして、弁当をつかはせ給ひて、ゆくゆくとしてをはしたまひし処に、車軸の雨が降りかかる処に、永禄三年庚申五月十九日に、信長三千ばかりにて切てかからせ給えば、我も我もと敗軍しければ、義元をば毛利新助が、場も去らさせずして打取る。松井を初めとして拾人余、枕を并^{ならべ}打死にをしけり。

『信長公記』 太田牛一 「角川文庫」による

此時、信長敦盛の舞を遊ばし候。……山際迄御人数寄せられ候処、俄に村雨石氷を投打つ様に、敵のつらに打付くる。身方は後の方に降りかゝる。……空晴るるを御覧じ、信長鎧をおつ取て大音声を上げて、すはかゝれ〜と仰せられ、黒煙立てゝ懸るを見て、水をまくるがごとく後ろへくはつと崩れたり。今川義元の塗輿も捨てくづれ^逃れけり。……旗本は是なり。是へ懸れと御下知あり。……服部小平太、義元にかゝりあひ、膝の口切られ倒伏す。毛利新助、義元を伐臥せ頸をとる。

- ・信長周辺の場所、毛利新助周辺の場所、今川義元周辺の場所 すべてに目が行き届く。
- ・その性格 共同的、事後的 (神の如き視点)

事件の後、いろいろな人から聞いた話しを取りまとめたもの → 物語・小説

*物語 歴史叙述をまねる。 歴史叙述型

・三遊亭円朝講談筆記『怪談牡丹灯籠』

幽霊に取り殺される萩原新左衛門側の話し

仇討ち物語の出発点となる飯島平太郎側の話し

作中たえず交錯している。 全体をつかんでいる当事者はいないはず。

語り手はその多数の登場人物の供述調書をすべて回収したのちに、事後的に話しをまとめる。

ノンフィクション・ノベル トルーマン・カポーティ『冷血』(1965)

初めからその種の手法が宣言されている。

*渦中の当事者 渦中型

『海辺の光景』(安岡章太郎 1959)

A 片側の窓に、高知灣の海がナマリ色に光っている。小型タクシーの中は蒸し風呂の暑さだ。栈橋を過ぎると、石灰工場の白い粉が風に巻き上げられて、フロント・ガラスの

前を幕を引いたようにとおりました。

B 信太郎は、となりの席の父親、信吉の顔を窺った。日焼けした頸を前にのぼし、助手席の背に手をかけて、こめかみに黒みがかった斑点をにじませながら、じっと正面を向いた頬に、まるでうす笑いをうかべたようなシワがよっている。一年ぶりに見る顔だが、喉ぼとけに一本、もみあげの下に二本、剃り忘れたヒゲが一センチほどの長さにのびている。大きな頭部にくらべてひどく小さな眼は、ニカワのような黄色みをおびて、不運な男にふさわしく力のない光をはなっていた。

C「で、どうなんです、具合は」

「電報は何と打ったんだかな、キトクか？……今晚すぐというほどでもないようだな、まア時間の問題にはちがいないが」

信吉は口の端に白く唾液のあとをのこしながら、ゆっくりと牛が草を噛むような調子でこたえた。

「ほう」

信太郎は、父親が話し出すと事務的なこたえ方になった。（中略）この部落がつきると、道路は平坦になり、やがて二た股になって別れる。

D ーー来た、と信太郎はおもった。

E 一年前、運転手がラジオのスイッチを入れたのは、ちょうどこのあたりだった。古い大型の車で、運転手の隣に信太郎が、うしろの座席に父親と伯母が両側から母をはさんで坐っていた。後部のトランクに夜具が一と揃い収めこまれてある……。波長のととのわないラジオは部落をとおりこすと同時に、高く鳴り出した。

3-3 物語の文章

*普通は歴史叙述型

*文章を次の四タイプに分ける。

人事記述	地	人の行為・状態の記述・説明	太郎は花子を好いていた。
情景描写	地	情景、自然、物の有様	
心中		内心の思いの直接的表現	「好きだ」と太郎は思った。
会話		会話の引用	「好きだ」と太郎が言った。

*桶狭間合戦はどうだったか。

匂宮「これよりあなたに参りつるは誰そ」と問ひたまへば、女房「かの御方の中将の君」と聞こゆなり。なほ、あやしのわざや、誰にかと、かりそめにもうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよ、といとほしく、この宮には、みな目馴れてのみおぼえたてまつるべかめるも口惜し。「おりたちてあながちなる御もてなしに、女は、さもこそ負けたてまつらめ。ーー寝ざめがちにつれづれなるを、すこしはすきもならはばや」など思ふに、今はなほつきなし。

（匂宮が「ここから向こうへまいったのは誰か」とお尋ねになると、「あちらの御方の中将の君」と申し上げている声がある。（薫）「何とも不都合なことよ。あの女は誰なのかとかりそめにも目をつけている男に、すぐさまこのようにむぞうさにその名を申しあげることがあるものか」と、その人が不憫に思われ、またこの宮には女房たちが一途にな

れなれしくおうちとけ申しているらしいのも残念に思われる。(薫)「熱心で強引なおふるまいに、女のほうはああして負けてしまうのだろう。一一寝覚めがちに所在ない折ではあるのだから少しは色めいたしぐさもまねてみようか」などと思うにも、今はやはりその気になれないのである。(『源氏物語』「蜻蛉」 小学館古典文学全集)

会話+人事(地)+心中

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮れのほど、常よりも思し出づること多くて、靱負命婦といふを遣はす。一一命婦かしこまで着きて、門引き入るより、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。一一a月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。(「桐壺」)

会話+人事(地)+心中+情景

『東海道中膝栗毛』

北八あたりを伺ひ見れば、皆旅勞れのかけ合軒ゴウ〜スウ〜ムニヤ〜 時分はよしとききた八、そつとおき上れども、あかりはなくまつくらやみ、そこらあたりを、さぐり廻して、よふ〜とはしごとりつき、二かいへあがり見れば、……やがて四ツばひになつて、さぐりまはり、むすめとおもひ、ばゞアがねているふとんの中へはいこみ、そろ〜なでまはし、ゆすりおこせば、ばゞアめをさまし、だれだ、あによヲする トいふこへに、北八うろたへ、さてはかどちがへせしと、にげだすひやうしに、あしへたけのとげをたてゝ、ばつたりこけると、……(『東海道中膝栗毛』二編下 一八〇二〜一八〇九)

会話+人事(地)

『春色梅ごよみ』(一八三二〜一八三三)から二カ所

素顔自慢か寝起の儘か、つくろはねども美しき、花の笑顔に愁の目元、亭主はびつくり(かほ)うちながめ主「米八じやアねへか。どふして来た。一一」トおきかへりてすはる よね「わちきやア最、知れめへかと思つて胸がどき〜して、そして一一」(初編・巻之一)

米八つく〜とかんがへ思ふに、此お長は丹次郎がいひなづけといひ、まづわが身のためには主すぢなれば、わるくすると男をとられるも知れず、また丹次郎も好物の娘なれば油断はならず、はやく明白^{ひやくめい}でいひ出すにしかず、そのうへ義理で二人が心をとっておさへ、

たとへお長が何とおもふとも、此方^{こつち}はやけに隠さぬが、後手にならざる用心と胸算用の差引して、お長に杯をさし よね「ハイはゞかりながら少しお呑みな 長「そんならちいつとついでおくれ よね「梅次さんどうぞ」(巻之四)

会話+人事(地)+ (心中) 稀

俄にバツと西の方が明るくなった。見懸けた夢を其儘に、文三が振り返って視遣る向ふは隣家の二階、戸を繰り忘れたものか、まだ障子の儘で人影が射してゐる。……スルト其人影が見る間にムク〜と膨れ出して、好加減の怪物になる……——文三はホツと吐息を吻て、顧みて我家の中庭を瞰下ろせはせ、所狭きまで植駢べた草花立木なぞが、——（『浮雲』 一一四）

どうも気が知れぬ、文三には平気で済ましてゐるお勢の気が呑込めぬ。／（改行）若し相愛してゐなければ、文三に親しんでから、お勢が言葉遣ひを改め起居動作を変へ、蓮葉を罷めて優に艶しく女性らしく成る筈もなし、（中略）折節に物思ひをする理由もない。／若し相愛してゐなければ、婚姻の相談が有つた時、——他人同然の文三を庇護つて真実の母親と抗論する理由もない。／「イヤ妄想ぢゃ無い、おれを思つてゐるに違ひない……ガ……」（中略）「解らないナ。どうしても解らん。」（『浮雲』（二一八）

会話＋人事（地）＋心中＋情景（地）

	人事	情景描写	心中	会話
源氏	○	△	○	○
江戸戯作系	○	×	×	○
現代小説	○	○	○	○

*内面（心中）については、「島村抱月」参照。

3-4 情景描写

- ・心中 登場人物の思い言語
- ・情景描写 登場人物視点・焦点人物視点の思い言語（「源氏」の情景描写は異なる）

「海辺の光景」B、「浮雲」一一一、一一三、「あひゞき」
ある位置からの光景 → その光景に視点者がいることが分かる。

渦中型 心理 「心理描写」「内面描写」などと呼ばれる。

視点 事件の渦中に視点者（登場人物）がいる。

語り手は視点者の場所から描写している。 視点的情景描写

その描写は登場人物を渦中に投げ込む。

その描写は登場人物の「思い」に通じる。

視点的描写 世界と視点を同時に与える。

方法 「太郎は空に目を転じた。そして、ああ、白い雲が流れているなあと思った」

「太郎は空に目を転じた。白い雲が流れている」

夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る 情景描写

お手々つないでみな帰ろう 鳥と一緒にかえりましょ 心中＋会話

この情景描写（視点的情景描写）は、口にするかも知れないし、しないかもしれない。

言語化するかもしれないし、言語化しないかも知れない。

「思い言語」に還元できる。

*技法 内面描写＋視点的情景描写 技法として普及

3-5 硯友社系（硯友社タイプ）の言文一致体

尾崎紅葉、広津柳浪、斎藤緑雨、川上眉山、江見水蔭、小栗風葉、小杉天外、泉鏡花

明治27

- ・紅葉 「紫」 読売新聞1月
- 「冷熱」 読売新聞6月

明治28

- ・紅葉 「青葡萄」 読売新聞9月
- ・水蔭 「女房殺し」 文芸倶楽部10月

明治29

- ・二葉亭 『片恋』 11月刊
- ・紅葉 「多情多恨」 読売新聞2月、9月
- ・水蔭 「泥水清水」 文芸倶楽部4月
- ・柳浪 「今戸心中」 文芸倶楽部7月
- ・風葉 「失恋詩人」 文芸倶楽部11月
- 「亀甲鶴」 新小説12月 *文語体

明治30

- ・二葉亭 「肖像画」訳 太陽1～3月
- 「夢かたり」訳 文芸倶楽部4月
- 「うき草」 太陽4～10月
- 『浮雲』 太陽臨時6月
- ・紅葉 「金色夜叉」 読売新聞1月～ *文語体
- ・水蔭 「慕城橋」 新小説1月
- 「島守」 新小説5月
- ・風葉 「一七八」 新著月刊8月

明治31

- ・魯庵 「くれの二八日」 新著月刊3月

明治33

- ・風葉 「五反歩」 新小説7月
- ・天外 「楊弓場の一時間」 新小説7月
- 「初すがた」 春陽堂8月

*『一七八』 小栗風葉

然し、自分の最も懊悩したのは、落第其のものよりも、寧ろ落第より引いて及ぼす、各務一家の意向である。主は左も右、房代は抑何と思ふであらう？殊に小母は今まで盛んに歓待してくれた其反動でもって、如何に厳しく愛想を尽かすであらうと謂ふ事。此試験さへ済ませば結果の良否に関らず、直様帰郷すると言置いた国元の事などは、余程後まで念頭にも浮ばなかったのである。

*「法曹試験の受験生が試験に失敗し己の居場所を失う」 → 久米正雄『受験生の手記』(1918)

*「房代」というのは、主人公が恋をしている娘であるから、話しはまさに『浮雲』そのものであるが、一人称小説であるこの小説には、主人公の内面が綿々と綴られている。

→ 一人称小説 「浮雲」型内面描写に魅力を感じている。
視点的情景描写に乏しい。 直接的心中表現に乏しい。

* 『五反歩』 小栗風葉 明治33

a 娘は猪口を老父に任せておいて、^{ちさ} 苜を摘みにと起つ。

知らぬ間に月は高くなつて、亮然と水飴色に輝いて、高く～澄み度つた空には、砂子の如くに煌き零れてみた宵の内の無数の星も、今は大粒なのを僅に残して大方は見えなくなつた。一一天地は然白玉の内に凝結した如く、飽くまでも清く、飽くまでも涼しく、飽くまでも静かな間を、折節月夜鳥の鳴いて行く其羽影も明らかに認められるのである。ながら何所やらで麦粉を挽く臼の音が、蛙の声に交つて睡さうに聞える。

b ……其の消えた向方に白い影の動くのは、例の娘が水を汲んでゐるので、*ぎいぎいと云ふ悠長な*はねつるべの音が歎むと同時に、颯と翻けた水は然ながら水銀のやう。旋て亀子箆に載せて来た苜の葉は、小気味好く肥え縮れて、紫懸つて、洗立ての*うるほひは月の雫も宿してゐるかと思はれた。夜露に？しとつた娘の浴衣の袂の中に、螢の匍ふ影が青く透いて見える。

→ 視点的情景描写に近づいている。 内面を語るべきはっきりした視点者がいない。

a 「娘」は焦点人物ではない。 b 視点が「娘」から離れてしまう。

* 『女房殺し』 江見水蔭 明治28

其非常の結果として、此所に居たゝまれない様になつて、不意と飛出した。……

夜だ、外は闇だ、潮頭楼間毎々々には燈火が綺麗に輝いて居る。海白く、空黒く、今にも夕立が来さうで、遠雷か、それとも潮声か、ぴかり～と電光は山の後で雲をつんざく。寒い程涼しい晩だ。堅吉にはそれが蒸暑く感じられて、身体の置所が無い様になつて来た。海へ飛込ふと思つた、何度となく海へ飛込ふと思つた。（「女房殺し」 明治28）

* 数理学校生徒・近藤堅吉の恋愛、結婚、破綻の過程が綴られる。当時出色の出来映え

→ 視点が堅吉から離れてしまう。

* 『青春』 1905 小栗風葉

「主人公への同情が足りぬ」、「風葉と欽哉<主人公>との間にはこうした内面のつながりは全くなく、彼を外面からいわば世相の一部として眺め、彼の行動を外面から^{たど}りながら、これを批判しているだけ」（中村光夫 『風俗小説論』 1955）

* 硯友社系の作家は戯作者系 歴史叙述型に流れがち

小説をエンターテインメントと考えていた。 その場合は、あえて口語体にはしない。

3-6 文学界・民友社系の言文一致体

島崎藤村、国木田独歩、田山花袋、徳富蘆花

* 田舎教師

『田舎教師』の主人公のモデル 主人公である人物は、日記を付けていた。
花袋は随筆集「インキ壺」（一九〇九）中にその日記を書き写している。

八月一日 二階の窓によれば野の朝の雲に清けきかゞやき見えて、勇しき夏の光は又栄え行かんとす、濃き緑のときはあけびの葉に露心地よし。

三日 鉄道線路の西の森に散歩して野花を採る。えりころ、おひしば、ひよどりそー、こもつなぎ、なでしこ其他名の知れぬ花など。ひあふぎ、ききよふ、秋海棠を見る。……

此日記は九月一日までで終つて居る。七日には此作者はもう此の世に居なかつた。私はこの『田舎教師』の歩いた道、住んだ処、勤めた学校にも行って見た。そして此日記につけてある頃、矢張同じやうにして野の花を採集したことがある。日の光と野の花と夕の雲と、それが何だか私とかれとの間に深い関係があるやうに思はれた。野の道を歩いて居ると、かれが袴をつけ麦藁帽子を被つて其処に居るやうな気がする。利根川の土手、寺の本堂、私は四辺の光景を見る度に、かれのことを思つた。

心理を外物で顕はすといふ氣になつたのは此頃からである。（『全集一五』所収）

→ 心理を外物で表すだけではない。

外物を描写することで、視点人物をその場所におく。

→ 視点描写 心中文 → 一人称小説 私小説

3-7 ホトトギス系の写生文

・雑誌『ホトトギス』 明治30 松山創刊、明治31 東京へ移転

正岡子規、高濱虚子、漱石、伊藤左千夫

・写生文（叙事文）を主張

かなり大きな影響力があった。

（二）仲見世

仲見世の繁盛は芝居の茶屋に異らず。丹塗りの見事なる山門の引幕は正面に雲に聳えて、紅梅焼あれば白梅焼あり、豆腐御料理あれば宇治の里御茶漬一人前五銭あり。下足番は、久米平内兵衛長盛が昔乍らの仏頂面に娘子供をいやがらせ、仁王の草鞋を穿いて一寸小便に行くはおつくうなり。聞くならく軽焼は旧弊にして軽便焼きが当世なりと。（虚子 『ホトトギス』 明治31年-32年）

・虚子の写生文は口語体へ 「三尺の庭」

この頃は障子を明け放す日が多い。障子を明けるとすぐ前が一間半の高い煉瓦の塀だ。これは医学博士とやらが邸宅の入り口の高塀の一部分なのだ。この塀の内に在る幅三尺の土が則ちわが草庵の庭なのだ。

其処に一本の柘榴の木がある。この頃若葉が一寸許になつて新鮮な黄色がゝつた緑の色を惜しげも無く吹き出している。随分乱暴な枝の出方で殊に葉が十本ばかりも根元からついでと出てゐるのを皆其の儘に伐らずに置く、……

柘榴に並んで右傍に一本の不景氣な松の木がある。葉も半以上枯れてゐるが其の枯葉の

中にまだ青々した葉もある。（「三尺の庭」 明治三二年五月『ホトトギス』）

・子規の「叙事文」の解説

こゝに言はんと欲する所は世の中に現れ来りたる事物（天然界にても人間界にても）を写して面白き文章を作る法なり。

或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、それを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只ありのまゝ見たるまゝに其の事実を模写するを可とす。例へば須磨の景色の景趣を言はんとするに

山水明媚風光絶佳、殊に空気清潔にして気候に変化少きを以て遊覧の人養痾の客常に絶ゆる事なし。

など書きたりとして何のおもしろみもあらざるべし。更に一步を進めて

須磨は後ろの山を負ひ播磨灘に臨み僅かの空地に松林があつてそこに旅館や別荘が立つて居る。砂が白うて松が青いので実に清潔な感じがする。……

など書かんか、前の文章に比して精密に叙しあるだけ幾分か須磨を写したりといへども、須磨なる景色の活動は猶見るべからず。更に体裁を変じて

夕飯が終ると例の通りふらりと宿を出た。燿くが如き日の影は後ろの山に隠れて夕栄のなごりを塩屋の空に留て居る。街道の砂も最早ほとぼりがさめて涼しい風が松の間から吹いて来る。狭い土地で別に珍しい処も無いから又敦盛の墓へでも行かうと思ふて左へ往た。……

の如く作者を土台に立て作者の見たことだけを見たとして記さんには、事柄によりて興味の深淺こそあれ、とにかく読者をして作者と同一の地位に立たしむるの効力はあるべし。作者若し須磨にあらば読者も共に須磨に在る如く感じ、作者若し眼前に美人を見居らば読者も亦眼前に美人を見居る如く感ずるは、此の如く事実を細叙したる文の長所にして、此の文の目的も亦読者の同感を引くに外ならず。（「叙事文」『日本』明治33年1月～3月）

儀式風俗等を記して各地方より寄贈を辱うしたるは我等の多謝する所なりといへども、其文の体裁は多く概叙的にして個人的ならざるために幾許か平凡無趣味に陥りたるは甚だ遺憾とす。……例えば左義長（又はどんとともいふ）の事を記するに

我地方にては一月某の日左義長といふ事あり。其方法は其前日に町中の子供等打ちつれて家々を廻り其家の飾りを貰ひ集め云々……此時皆持ち来たりし餅を竹の尖に挟み其火の中に入れて焼き之を喰ふなり云々

など書かんには……左義長の趣味は全く之を感ずる事能はず。（中略）若し一人の人ありてわざ～左義長を見に行きて其日の模様をありのまゝに書かれたらんには必ず面白き文となりしならん。例へば

……此日の朝は一面の曇りで空は猶雪を催し居る。町はづれに出ると北の方に見ゆる山脈は一面に雪をかぶつて其中で一番高いのは〇〇山である。……

火は次第に拡がつて竹のはじく音は実にすさまじい。忽ち〇〇おろしが吹いて来たと思ふと焰は頂迄吹き抜いて、見る～眼前に一個の火の柱は現れた。云々……

の如き体裁に書くなり。併し我は大仕掛けの左義長といふもの見し事あらねば全く之をく

写し>出だす能はざれども若實地に左義長を見し人の見た儘を写し出ださば必ずや左義長の火の柱は読者の眼前に来るべし。（「叙事文」）

- ・「写生文」は、情景だけでなりたっている小説のようなもの
面白いものではない。

子規 「文章には〔山〕が無ければならない」 「山会」という文章会

虚子 「山」は「写生文」の邪道

- ・徹底した一人称側からの記述 なぜこのような試みをしたか。

- ・アントニオ・フォンタネージ イタリア人

明治期日本近代西洋絵画の中心人物、工部美術学校のお雇い教師（明治9年－11年）

中村不折は子規の友人でフォンタネージの孫弟子 子規は西洋絵画に共感

透視図法 パースペクティブ

パースペクティブ 「描く人＝（絵画を）見る人」の位置・視点を明瞭に示す描写法

*近代写生画の魅力

近代小説の魅力

自分が・世界の・中に・いる 渦中にあること → 主体性

渦中型 渦中型の小説から人事を取り去ってしまったもの 写生文 余裕派

俳句 連翹やかくれ住むにはあらねども 万太郎

4 近代小説の系譜

浮雲 ⇒ 硯友社系口語体 →

⇒ 文学界系口語体 独歩、藤村、花袋、漱石、鷗外

⇒ 写生文系口語体 →